

古くて新しい問題

——理論社会学の今日的諸問題(1)——

中 野 秀 一 郎

まえがき

1978年10月～12月、関西学院大学大学院社会学研究科に故 Talcott Parsons を迎えて一連の集中講義を受ける機会がありましたが、その折通訳や解説のお手伝いをする中で「人間の条件」論を含む70年代のパーソンズ社会学理論を垣間見たのが最後で、その後はスタンフォード大学への留学期間(1980～1981年)も含めてもっぱら政治社会学(アメリカ保守主義の研究)や医療社会学(特に〈死〉をめぐる諸問題)にかまけ、理論社会学の研究をややおろそかにしてまいりました。もちろん、その間にも〈理論〉と関わる作業がまったく皆無であったわけはありません。アメリカへの手みやげ(名刺替り)として用意した“Functionalist Sociology Since the 1950's”

(*Kwansei Gakuin University Annual Studies*, Vol. XXIX, PP. 73-85) では旧態依然たる構造・機能主義社会学批判に対して一矢を報いるべく、50年代以降の「機能分析」

(〈System-〉Functional Analysis) の自己修正と理論的洗練を跡付けようと努めましたし、他方、渡米前の集中講義では、パーソンズ来学を記念して創設された「行為システム論」の講義において、行為論から(社会)システム論への移行の内在的理論をいささか究明してみようとも努力したわけであります。新睦人氏との共訳「一般社会システム論」(Walter Buckley, *Sociology and Modern Systems Theory*, Prentice-Hall, 1967) が誠信書房から出版されたのは1980年夏、丁度渡米を前に長年の持病であった十二指腸潰瘍を「総括」した時期でありましたが、Buckley の提起した方向への社会システム論の修正と洗練は夙にわれわれもその必要性に気付いていたところで、楽屋裏の話になって恐縮ですが、実はこの本の翻訳はほぼ10年近くも前に完了していたのであります。いうまでもなく、この書物の主張は、一つには社会システム・モデルの「動態化」であって、Equilibrium → Homeostasis → Morphogenesis へとシステムの構造原理を移行させることで、open で adaptive-morphognetic なモデルを導出すること、今一つは「シンボル化」(と私はよんでいます)、すなわち cybernetics

の発想を全面的に適用して、情報処理のプロセスとそのネットワークを中心に社会システム・モデルを構築しようとするものであります。こうした示唆を全面的に受け入れてわれわれなりに「社会システム論」を書くことは、当然、この段階での課題であり責任でもあったわけですが、この作業に関しては(少なくとも、筆者に関する限り)、アメリカでの〈片手間仕事〉となってしまう、充分な材料と思索が整わぬままに「分担部分」を書き終えてしまわなければならなかったのも、共同執筆者(新睦人氏)には大変御迷惑を掛けてしまったのであります(新睦人、中野秀一郎共著『社会システムの考え方』、有斐閣、1982年)。なお、この書物に対する馬場靖雄氏による書評とそれに対する著者のコメントが『ソシオロジ』、第28巻2号、1983年9月、に載っておりますので御参考までに申し添えておきます。

こうした一連の社会システム論との関わりとは別に、安田二郎教授担当であった「社会学原論」を1982年度から関西学院大学社会学部で講義することになりましたので、準備不足は覚悟の上、むしろこの授業を利用して理論社会学に関わる諸問題を考えてみる機会にしよう、一寸無責任な格好でスタートいたしました、それでも丁度二年目の講義を只今完了したばかりです。基本的な考え方としては、「社会学原論」をまず社会学の「成立根拠」を問う、すなわち換言いたしますと、〈社会学の研究対象と研究方法を確定する〉という作業と定義し、若干知識社会的な分析視角をも援用しつつ、現代の理論社会学の〈状況〉を切ってみることにしたわけであり、やや客観的(第三者的)な感想もきいておきたいということもあって、この講義に関しては、初年度(1982年度)には大学院生の小林久高君に、また第二年度には研究員の柳原佳子君に、それぞれ御足労願って講義を聴講しメモをとってもらうことにいたしました。その概要については、近く私案〈社会学原論・講義ノート〉として発表したいと考えておりますが、なにしろ、あれこれ雑用などもあって、直ぐには無理なように思います。しかし、いずれにしても、社会学の〈対象〉と〈方法〉について毎週喋ったり考えたりする機会を与えられたことは、ともすれば怠惰に流れ勝ちな私にとって、〈理論〉

と関わり続ける上でなによりも有難いことでした。少なくとも理論社会学に対する〈関心〉だけは旺盛でしたから、この間パーソンズ研究に関して現われはじめた文献を中心に、書物は買っておくように努めましたので、〈ツン読〉では若干の成果も上ったのであります。もちろん、この先、こうして集めた文献を今度は実際に読まなければなりません。したがって、酒も少しは控えなければと考えている昨今ではあります。(ちなみに申し添えますと、1983年の関西社会学会大会で「われわれは社会構造をどうみるか」というシンポジウムの司会——徳永恂氏と共に——をおおせつかったことも理論社会学との関わりで大いに勉強になりました。)

問題状況と素材

さて、過去数年間は以上のような状態で過してまいりましたが、概説的、教科書的なレベルでの議論はともかく、理論社会学の本格的な研究論文ということになれば、これという成果・業績もないままに、というのが正直なところで、社会システム論を中心にした個別社会学理論(この点に関しては、社会システムと文化システムの相互浸透を扱うモデルの構築を当面の課題としてもっているのではあります——)の展開に対する貢献も、昨夏脱稿した社会成層、比較社会構造、社会変動、知識社会学などに関して「体系—機能分析」の視角から論述した解説的論稿(中久郎編『構造機能主義の理論とその発達』、叢書『社会学の系譜』、第二巻、世界思想社、未刊)がすべてという始末ですから、〈ツンドク〉の文献群を前にしていささか焦燥感にとらわれる毎日が続いていたのであります。御案内のように、パーソンズ研究ひとつとりあげてみましても、50年代～60年代の批判的研究の時期を終えて、70年代に入ると(手元にある〈ツンドク〉の山を一寸掘り起してみただけでも)：

Guy Rocher, *Talcott Parsons and American Sociology*, Nelson, 1974

Ken Menzies, *Talcott Parsons and the Social Image of Man*, Routledge & Kegan Paul, 1976

Francois Bourricaud, *The Sociology of Talcott Parsons*, The University of Chicago Press, 1977

Hans. P.M. Adriansens, *Talcott Parsons and the Conceptual Dilemma*, Routledge and Kegan Paul, 1980

Stephen P. Savage, *The Theories of Talcott Parsons*, The Macmillan Press, 1981

* Jeffrey C. Alexander, *Theoretical Logic in Sociology*, Vol.4. *The Modern Reconstruction of Classical Thought: Talcott Parsons*, Routledge and Kegan

Paul, 1983

Peter Hamilton, *Talcott Parsons*, Tavistock, 1983

など数多くの研究文献が輩出してまいりましたし、他方、社会システム論そのものはParsonsを越えてLuhmannやHabermasといった論者を中心により洗練された形で展開されるようになったというのであります。けれども私をして理論社会学の現状分析に向わしめたもっと直接的な原因は次のような事情でした。

1981年のアメリカ社会学会(以下ASAと記す)年次大会(第76回)はカナダのトロントで8月24日～28日に亘って開催されましたが、偶々滞米二年目、東海岸への旅行の機会を待ちながらスタンフォードで夏休みを過していた私は、これを渡りに舟と早速「学会見学」に出掛けたのであります。丁度、この大会を組織した当時のASA会長は、その翌年関西学院大学社会学部へこれぞ学術講演をお願いすることになるWilliam F. Whyte博士でしたが、それにしても御案内の通り、アメリカのASA年次大会は昨今ではその規模も大きく、広い会場(この時もSheraton CentreとHotel Torontoという二つのホテルが使われていました)で朝から晩まで多彩なミーティングが行なわれますので、どの部会を覗くかを決断することが大変に難しいわけでありました。ところが、丁度3日目(もっともこのセッションは朝の8時30分から始まるものでしたが)、Jeffrey AlexanderがorganizerになっているAction Theoryの部会があることを発見しましたので、これに出てみることに致しました。もちろん、「パーソンズ以後」(一連の若手グループ、その幾人かはすでにLuber, Baum, Effrat, and Lidz eds., *Explorations in General Theory in Social Science*, Vol. I & II, The Free Press, 1976を通して名前を知っておりましたが、かれらと接触することで、その現況を知りたいと思ったわけでありました)を明確に捉えるためにはこの部会が絶好の機会だと思われましたし、それに報告者のひとりに、すでに懇意であったNeil J. Smelserの顔もみえたので、これが勇気付けの役目を果たしてくれたのであります。ちなみに、この部会の四人の報告者とその演題は以下の通りでありました。

Dean R. Gerstein, "Durkheim's Paradigm: Reconstructing a Social Theory"

Victor M. Litz, "Notes on Influence"

Mark Gould, "Marx? Weber: The Role of Ideas in Social Action"

Neil J. Smelser, "Problems in Action Theory with Respect to Social Change"

御参考までに申し添えますと、このうちGersteinのものはRandall Collins, ed., *Sociological Theory*, 1983, Jessey-Bass, 1983に収録されておりますが、これは

Durkheim の『自殺論』に Parsons によって General Action System の四機能パラダイムとして定式化されたものの等価物を見出すという論文でした。

さて、この部会でパーソンズ理論が修正され洗練されているさまを直接見聞することができたわけです。同時にこのグループの何人かと個人的な繋がりを形成することにも成功しました。しかし、その代り、理論的にはいささか詳細なかれらの研究に通暁する必要にも迫られたわけであります。この宿題を今日まで持ち越してしまっていること、これがまさにかれらとの関係における私の〈債務〉として重くのしかかっているものですから、かれらの仕事の検討をも含めて理論社会学の〈現況〉を考察することが、これ以上放っておけぬところに来ておる始末なのです。

一寸具体的に申しますと、このトロントの学会の後、ワシントン D.C. で National Research Council に訪ねた Gerstein とはその後手紙や論文のやりとりがあり、若干の抜き刷り（“The Coming Renaissance of Functional Sociology”, *Contemporary Sociology*, Vol.8, #2, 1979, “A Note on the Continuity of Parsonian Action Theory”, *Sociological Inquiry*, Vol.45, #4, 1975 など）を送ってくれた以外にも、1982年度の ASA 第77回大会（SF）でも、1983年度の同第78回大会（Detroit, Michigan）でも、親しく再会して、ASA 理論部会としては現在行っているヨーロッパ社会学の〈理論〉の検討が一段落すれば、日本の社会学者とも同じ問題で交流をもちたいというような意向すら漏れ聞いてもいるのです。

同じグループに西ドイツから関わっている University of Düsseldorf の Richard Münch も1982年度大会の後、パーソンズ研究の論文（いずれも AJS の抜き刷り、“Talcott Parsons and the Theory of Action”, I & II, *AJS*, Vol.86, #4, Vol.87, #4）を中心にあれこれ抜き刷りを送ってくれています。

1983年度大会（Detroit）へは、奥さんが臨月だったために出掛けてこなかった Jeffrey Alexander も、1982年度大会（SF）では Action Theory の Supplementary Session で discussant として出席しておりましたが、たまたまこの年は私の帰りの飛行機がロスアンジェルス発でしたので、ロスに数日滞在していた間に UCLA の研究室にかれを訪ねることができました。出迎えに出てくれていた Jeff と行き違いになったお陰で、UCLA の社会学部内をうろつき歩いて、Melvin Seeman の研究室へ入り込んでお話をしたりする機会に恵まれたりもしたわけですが、Jeff はこの後自分の大著 *Theoretical Logic in Sociology* が日本でどのように評価されるかを知りたいと申しまして、大いに私を悩ませるわけでありま

す。この点についても、〈借金〉が残っておりますので、今回この機会に手元にある第三巻までの分に目を通すと共に、いく人かの人びとも意見を書きみたいと思っています。私事に亘って恐縮ですが、なによりも私が Jeff を〈好青年〉を受けとめて、相応のお返しをしなければと考えている理由は、かれが私の論文集（それまでに書いた8編の英文論文を一括して綴じて表紙をつけた私家版）——これを私はアメリカで何人かの社会学者に差しあげたのですが——に対して一番親切で詳細なコメントを書き送ってくれたからであります。総じて、かれを含めてこの若き〈パーソンズの弟子達〉は、単に古典や理論の研究ばかりではなく、例えば Gerstein なら地方自治、Münch は科学技術、そして Alexander は政治社会学や人種問題、などにも積極的な関心をもっており、いくつか論文をものにしてしているのであります。かねがね社会学者たるものはすべからず(1)学説（古典など）、(2)理論、それに(3)具体的研究テーマ、の「三位一体」で社会学的営為を営むべきであると考えております私にとりまして、この点でも大いに意を強くするところがあったアメリカでの体験ではありました。

そこで、本題の理論社会学の〈現況〉に関する考察に入りたいと思うのですが、なにしろ研究文献の数がおびただしく、その上こちらは近年その全体に亘ってフォローをサボっておりましたので、取り急ぎのところといたしましては、こちら側の〈独断的事情〉（関心）に照して若干の著作に限定しつつ、かつまたきわめて大雑把な仕方（レベル）で問題を整理することをお許し願いたいと思うわけです。すなわち、社会学原論（講義）の問題意識に沿って、具体的には「社会の概念化」と「説明変数」に焦点を合せて若干の理論的労作を検討することですが、その際組上の〈鯉〉（?）と致しましては、以下の四人を選んでみようと思うのであります。

まず第一は、Irving M. Zeitlin であります。もっとも、ここでとりあげるかれの著作は1973年の *Rethinking Sociology: A Critique of Contemporary Theory*, Meredith Co., 1973 と少し古いのですけれども、実はこのトロント大学の教授が日本にいたく興味をもちまして、この秋（1984年）から関西学院大学社会学部の客員教授としてやってくることが確定しているのです。大学院のセミナーでは Marx と Weber を講じたいというような申し出もあり、〈世話係り〉の私としましては、〈機能主義〉に批判的なこの社会学者の考え方をひとわり知っておく必要がありそうだったので、一寸〈泥縄的〉な用意をしようというのが魂胆であります。周知の通り、かれの理論的統合の野心はすこぶる気宇壮大なものでありまして、Functionalism と Social Exchange Theory と Conflict Theory の三つを批判して〈構造〉に関しては

〈the Marx-Weber model〉がよろしいと提案した上で、これを補うために〈社会心理学〉が必要であるとして、Phenomenology や Ethnomethodology と Symbolic Interaction を批判・検討しつつ、Mead+Freud (+Marx) 図式を援用し、かくしてマクロ構造と社会心理学を包括する理論枠組を提唱するのであります。

第二に、Jeffrey Alexander をほっておくことはできません。もちろん、その大著を全面的に検討することは今回は不可能ですし、それに、Talcott Parsons を扱った第四巻がまだ私の手元にございませんので、ここではかれの基本的な発想や姿勢のみを問題にすることをお許しただきたいと思います。したがって、主として第一巻 *Positivism, Presuppositions, and Current Controversies*, RKP, 1982 をとりあげるだけとなりました。

第三番目に、これは一寸私の専門を外れる危険性もあるわけですが、Niklas Luhmann に言及しておきたいと思うのです。なにしろ、今日、社会システム論の中心的な議論は Parsons を離れて、この人に移行してしまったのだと多くの人がびとがいつているのですから——。もちろん、ここでは例えば社会システム論（の修正や洗練）に関する技術的な議論をするつもりはありません。全体の問題意識がそうなのですけれども、要するに、今、理論社会学に何が起っているのか、いい換えれば、さまざまな論者達は、何を問題にして議論し合っているのか、そのことをはっきりさせておきたいということなのです。そこで、Luhmann に関してもきわめて基本的なところしか扱いません。個人的な事情をここでもつけ加えておけば、実は Luhmann もまた一昨年（1982年）秋に日本を訪問した折、関西学院大学社会学部において秋季学術講演会の講師としてお話を聞く機会があり（正確には、10月8日のこと）、当時西ドイツに留学中であった新睦人氏の紹介もあって、あの大学者にしてはきわめてキサクな氏を私の研究室に御案内して雑談を交すことができたのであります。

最後に、今回とりあげておきたいと思う社会学者は、プリンストン大学の Walter Wallace であります。昨年（1983年6月3日）、かれのためにアレンジした関西学院大学社会学部での研究会で Wallace はきわめて大胆かつ明瞭に「社会学とは何か？」という難問題に対するかれの「答え」を披瀝したのであります。いわゆる〈実証科学〉的な発想をベースにして、白板一杯に繰り上げられたかれのアイディアは多くの参加者を驚かせるに充分なものでしたが、その際、かれは、近くこの構想が本になるといい、出版の晩には一冊進呈したいということで別れたのであります。*Principles of Scientific Sociology*, Aldine, 1983 という大著が約束通り届いたのは暮れもあ

じつまった昨年の12月27日のことでありましたが、いわゆる70年代後半の Biosociology の登場以来、こうした視角からの〈社会学〉（の傾向）を無視することはできないと思われますので、個人的感傷抜きでもこの著作はとりあげる価値があるかと愚考するしだいです。いずれにしても、これら四人は一寸した個人的事情で私と結びついているというものの、オーソドックスな（機能主義）批判から出発する Zeitlin, 〈Post-Parsons 時代〉の若き獅子達を代表する Alexander, Parsons 以後の社会システム論を担っているといわれる博学の Luhmann, そして〈Scientific Sociology〉の旗印の下に大著をものにした Wallace と、それぞれがそれぞれの仕方での今日の理論社会学（のあり方）と深く関わっておりますので、かれらを並べて考察することにいささかの「正当性」があるようにも思うのです。もちろん、この点は読者の御判断に委ねなければならないわけでしょうが——。

さて、上のような事情でこれら四人の論者をとりあげて、今日の理論社会学をめぐる諸問題の所在を確認しておこうというわけなのですが、これを一体どのような形で行なおうとしているのかという点を含めて、今少し私なりの考え方を述べておきたいと思います。

社会学を「社会」（あるいは社会現象、社会的事実）を研究する学問であると定義した場合、この「社会」（の概念化）をめぐる議論が起るのは当然予想されるところですが、同時に、その性格規定によってはなにを〈説明変数〉にするのか、換言すればその社会をどのように理解し説明するのかという〈方法〉にも大きな差異が生ずることは必至であります。しかるに、〈社会の説明〉もまた、他の科学的（認識的）営為と同様に人間の〈知〉的能力が行なうものでありますから、その〈やり方〉に関しても長い試行錯誤の歴史があるわけで、ここでは、もちろん、哲学的認識論の歴史を繙くいとまはありませんが、このことから「社会」に対する認識に関しても、たとえ議論を「近代科学」以降に限定したとしても、いくつかの伝統的な認識論的フレームをめぐる問題が生ずるのであります。すなわち、便宜的な dichotomy を使うと、いわゆる Materialism vs. Idealism と Elementalism vs. Holism がそれであります。これら二つの対立軸は、共に社会の存在様態を概念化（認識）しようとする仮説的試みですが、もちろん、この二元軸それぞれのどちらの極を選択するかによって、説明の仕方にまで影響が及ぶのは避け難いことだと思われます。

前者についていえば、Materialism はしばしば実証科学的なアプローチと結びつき易いし、人間の意図を越えた自然史的過程として人間・社会事象を捉えます。他方、Idealism は人間の主意主義的特性を強調するため、自然過程とは区別される人間社会事象を想定しますが、こ

の伝統は Humanism (人文主義) として近代思想の中に根強く存在したものです。

同様に、後者に関しても、思想史的な背景、例えば近代以降の Individualism (個人主義) の展開などとも絡んで、社会学の領域でも〈個人か社会か〉、あるいは社会学主義と心理学 (的) 還元主義の対立などとして多くの議論を生み出したのであります。いずれにしろ、これら二つの対立軸は数多くの具体的な述語によって表現することができるきわめて基本的な問題状況を表わしており、やや結論を先取りしていえば、理論社会学をめぐる多くの論争は今日なお、これらの点をめぐって争われているといっても過言ではないのであります。

明らかに、その関係様式の定式化さえ確定すれば、Parsons の行為システム論はこうした問題に関してきわめて卒直な解答を用意しているのであって、社会システムと文化システムの相互関係の解明は前者の軸で表わされる問題に、また社会システムと人格システムの相互関係の解明は後者の軸で表わされる問題に、照応しているというべきでしょうが、こうした〈社会システム論〉の観点から技術的な議論を展開することは、すでに申しあげた通りここでの作業ではありませんので、それは別の機会に譲らねばなりません。けれども、以下に検討するように、これらの論点をめぐる議論の重要さは今も昔もあまり変わっていないように思われるのです。

今回の議論と直接噛み合うことは少ないかと思いますが、社会 (現象) を社会学が概念化する仕方 (それは構成要素が織りなす構造の記述とそのダイナミズムを説明する諸命題をも内包することになるはずです) に関して、私が常づね考えているところをこの機会に併せて披瀝しておきたいと思います。それは、社会 (現象) の特徴や問題性に社会学がこだわるとしたら、この辺りではないかという示唆の開陳に過ぎないかも知れませんが、若干後々説明を加えるように、これらは過去のいくつかの〈社会学〉の型と密接に関係しているものであります。

その第一は、上に論じた二つの軸の〈組み合せ〉からできる四つの象限をもった社会モデルの構想ですが、このモデルはたまたま既存の諸社会学 (説) を整理するための座標としても使えるところから、象限間の関係はむしろ、これら学説の補完関係の問題として (例えば、Marx と Weber とか) 考えることができたわけであり (拙著、『体系機能主義社会学』、川島書店、1970年、参照)

第二に、機能分化モデルという発想が可能です。社会有機体説や Social Darwinism の影響をもちに被った初期の機能主義理論は、当初の類推 (アナロジー) を超えて、今や例えば Parsons の four-function-paradigm のような独自の運動法則をもつ社会モデルとして洗練され

た姿をとり始めています。また、この発想は Marx と Durkheim を通底する社会認識のパターンとしてみますとその重要性が見直されるべきものでありまして、これが昨今の GST や Cybernetics と結びついて、今日、素朴な (構造) 機能主義批判を超える理論的レベルに到達していることはいうまでもありません。

第三に、位層モデルについて述べておかねばなりません。社会 (現象) の概念化をめぐるこの種の variation は、通常階級論や社会成層論によって考えられるような hierarchical な社会構造に限定されるものではなく、むしろやや大仰に言えば French Structuralism にまで繋がっている社会の〈深さ〉 (deep structure) に関する認識と大いに関係しているものであります。その具体的な定式化のひとつは Georges Gurvitch の〈la sociologie en profondeur〉のそれでしょうが、structural anthropology の発想もまた現象学の影響を受けながら社会現象の同じような〈特質〉に関心を向けたものであります。しかし、より具体的な次元に限定しても、例えば Merton の visibility (or/and observability) の概念が示しているような現象レベルがあり、その操作可能性 (artificial visibility と invisibility) ともあいまって、この発想は役割 (構造) 理論の興味ある一領域を構成するものと思われるのであります。

最後に、制度化レベルのモデルという focal point について説明しておきましょう。未だ変動論との結びつきを充分検討しているわけではないのですが、私見によれば社会 (現象) はその制度化の度合に応じてさまざまなパラツキをもっているということです。そして、多分、その度合は、例えば Parsons の進化論的変動の最終プロセスである generalization of values を最高の形とするものとも考えられましようが、いずれにしても人びとの行為が正当性と反復的規則性をもって安定する状態が〈制度〉の意味するところであり、実は自然状態に対立する〈社会〉という概念はこのように人工的〈制度〉 (約束事の世界) として成り立っているというのが基本仮説であります。この点につきましても、社会システムの四つの機能分化下位システムに即して、その基底的価値 (物) とその上に形成される一種の〈信用〉としての〈制度〉 (Parsons の generalized exchange media に対応) については別の所で論じたことがありました (拙著、前掲書)。

以上、四つのモデルは社会の概念化を考える上での社会的関心の焦点を示唆したものでありまして、相互にまったく無関係というのではなく、むしろ〈社会構造〉論としてはその関連分析が重要かと存じますが、今は詳しく述べるわけにはまいりません。さらに、これらに加えて、社会の〈性質〉や〈説明原理〉に関連して、いく

つかの相対立するモデルが提唱されてきたことは御案内の通りでありまして、それらはすべて社会学の〈対象〉と〈方法〉の決定になんらかの関わりをもつものであります。今回の論稿ではそれらについては触れませんが、そうしたモデルのいくつかを列挙してみれば以下の如くであります。

まず、社会認識に関わるものとしては、内容モデル対形式モデル、機能（過程）モデル対構造モデルなどが今までから問題にされてきました。前者に関しては、周知の通り、Simmel に代表される形式社会学（社会学的形式主義—Sociological Formalism）の提唱が行なわれて以来、その発想は社会学の理論構築に大きな影響をもち続けてまいりましたし、その伝統は現在でも行為論、過程論、集団論などという基礎理論を指し示す述語に反映されているのであります。それは、科学的認識が一定の「論理形式」を要求されるものである限り、そして特にそれが具象を越えた抽象度の高い議論として問題になる場合、いわば科学的営為における一つの〈要請〉として出現するものであるかの如き印象さえ拭拭することができません。そうした意味で、先進科学の中で洗練された基礎カテゴリー（例えば、本来は物理学に由来すると思われる構造、運動、力、相互作用、距離、時間、空間などを社会学に応用することはまったく可能であります）は、常に後進科学に対してある種の〈分析指針〉を与え続けてきたと申してもよからうかと思うわけであります。他方、内容によりこだわり続けるモデルということになれば、それは究極的には〈歴史的個物〉の〈模写〉に帰着することになるのでしょうか、しかし、その内容に関しても徹底した個物からやや普遍的なカテゴリーへの連続が観察されますし、観察者がその便宜に応じてそのようにカテゴリー化するという作業が可能であることも否定し難いと思われます。Historicité の強調は、共時的分析理論の立場に対して絶えず繰り返し行なわれた批判のさいたるものであったわけであります。後者に関しては、構造機能主義の歴史的発展とそれをめぐるさまざまな議論の中によく表われておりましょう。初期機能主義分析における Radcliffe-Brown と Malinowski の論争は構造（強調）モデルと機能（強調）モデルの原型と考えられていますが、これが全体的秩序（拘束）と単位要素の自由性の問題とに対応していることに容易に気付くことができます。もっとも、〈構造〉と〈機能〉はその後明確な用語法を形造るようになりました。すなわち、ヨーロッパ種の構造主義（Structuralism）はほとんどその中に〈システム〉概念（これが、また、〈機能〉概念を包含するのですが——）を含むと考えてもよく、目的論（teleology）を表面に顕在化させることがない点は大きな差異というべきでしょうが、その基本イメー

ジはシステムと重なり合うのです。他方、〈機能主義〉に関しては、システム・モデルを前提にした機能分析（functional analysis）という考え方が定着して、〈機能〉概念は〈構造〉概念と対照的に使われる代りに、「〈システム〉は〈機能〉を媒介にして〈構造〉と〈過程〉という二つの様態を実現する」、というように理解されているのです。flow と stock が共にシステムの重要な側面であることは広く承認されることとなりましたから——。

社会（現象）の性質に関するものとしては、Dahrendorf の提唱した有名な合意モデル対闘争モデル、あるいは機械モデル対有機体モデルなどが考えられます。前者についていえば、古くは〈弁証法〉の発想、あるいは最近では feedback（negative or positive）をめぐる議論としてこれを理解することもできますが、社会理論としてはいささか〈イデオロギー性〉の強い色彩をもったモデル分類（この点は、機械モデルと有機体モデルについてもある程度当てはまりましょう）ではあります。こうしたことは、一般的には、社会のモデル化（概念化）自体が、それを構成する諸個人・諸集団の「利害状況」を規定することと大いに関係があるように思われますが、この種の問題は〈科学的〉という修辭をかぶせたからといって直ちに解決するものではありませんので、社会学にとっては一寸やっかいな（好むと好まずとに拘らず政治的な involvement を回避できない）問題でもあるわけです。機械モデルと有機体モデルについて考えてみても、西欧型の個人主義的契約型の市民社会モデルは前者の発想に親近性があり、逆にドイツ・ゲルマン型の全体主義的国家観は後者の発想に乗り易いと思われます。いうまでもなく、このイデオロギー性との関連でいえば、近代以降の社会思想（科学的モデルのメタ理論的基礎）には、主流としての「合理主義」（Rationalism）と「個人主義」（Individualism）が、また傍流としてはこれに対峙するいくつかのもの、例えば、Romanticism（反合理主義）、集合主義（Collectivism）などがあることは広く知られているところであり、それらの中間位置（換言するなら、それらの混合割合の差異に応じて）に多くの具体的 theoretical variation の現実形態が並ぶわけでありましょう。そしてこうしたメタ理論的基礎が全体社会の概念化のみならず、行為レベル、集団（組織）レベルでの〈社会学の説明〉のパターンを大きく拘束していることは、学史史を一寸垣間みるだけで充分納得できるのであります。

さて、少し前置きが長くなってしまいましたが、以上のようなフレームをもって既に述べた四人の論者の理論社会学に関する「問題提起」を次に眺めてみたいと思います。

Irving Zeitlin

Zeitlin は, Randall Collins の議論に負いながら, マクロレベルでは the Marx-Weber model を提唱するのですが, その要旨は, (1)伝統的機能主義の欠陥の指摘, と(2)Weber のアプローチ (historical-sociological) に関する定式化に端的に示されていると思われますので, その点をまず紹介しておきましょう。

第1点に関しましては, 伝統的機能主義モデルの問題点として, その(i)調和志向, (ii)非歴史性, (iii)現状維持的(保守主義的)バイアス, それに(iv)変動論の失敗(Zeitlin, 1973, p.15) が指摘されておりますし, 第2点では Marx に引き寄せた Weber の〈方法〉が次のような特徴によって規定されています。すなわち, (i)社会分析の単位は集団や組織である→これは反個人主義。(ii)これらの単位間の相互作用は闘争である→conflict model。(iii)安定状態とは利害の均衡か支配である。(iv)闘争が支配(とその正当性)を揺がせて, 変動を惹起する (op. cit., p.136)。以上の点を原文でみておくと次の通りです。

Traditional functionalism

1. exaggerates the unity, stability, and harmony of social systems;
2. imputes a predominantly positive character to all social institutions;
3. is a nonhistorical approach to social systems;
4. tends to regard existing institutions as necessary and indispensable and therefore entails a conservative bias;
5. fails to account for social change. (p.15)

また, Weber の歴史—社会学的方法の特徴は;

1. The basic unit of analysis is the *group*, or *organization*, viewed in relation to other organizations and groups with which it has contact.
2. and 3. The basic process that takes place in and among these units is the *struggle* of individuals and organizations to further their material and ideal interests.
4. The bases of stable coordination of human activities are *constellations of interests*, especially in solidary groups, and the *domination* of certain groups over others.
5. Political change is explained by the *struggle* for political advantage, both within and between states, made continual by the *instabili-*

ties and dilemmas of legitimatizing principles and of arrangements of domination. (p.136)-①

そして, the Marx-Weber model のメリットが次のように要約されているのです。

The advantage of what I have called the Marx-Weber model is that it keeps at the center of our attention the three most strategic institutional spheres of the present epoch: the *economic*, the *political*, and the *military*. For there can be no doubt that today and in the foreseeable future the most fateful question facing mankind is: Who controls the means of production, the means of political administration, and the means of violence?

(p.136)-②

要するに, こうしたモデルによってこそわれわれは社会分析の最重要課題, 〈だれが経済, 政治, 軍隊(暴力)を支配するか〉という問題に答えることができるのであると, いうのがどうもかれの主張のようです。このレベルでのかれの批判のポイントは, 機能主義が〈具体性〉と〈歴史性〉を欠落させているという点でありましょう。だからこそ, 〈均衡〉や〈機能要件〉というような非現実的な議論がバツコするるのであるというわけなのです。

Zeitlin はまた Parsons が1960年代に入ると, いわゆる〈進化論〉に回帰することも知っています。けれども, かれはそれに伝統的進化論以上のものを見つけてはできないと断言します。相変らず 〈normative elements〉(例えば, system-needs や societal goals) が強調されていて, 暴力, 権力, 葛藤の概念は抜け落ちているというのです (op. cit., p.52)。

確かに, adaptive capacity の上昇という発想は, 近代の中心的価値の一つである 〈progress〉を連想させますし, その内容もいささか不明瞭です。単なる survival functionalism ではないということであれば, adaptation の諸段階の問題が表われてきましようし, 操作的にはその明確な類型論も必要となるでしょう(例えば, primitive, intermediate, modern)。もっとも, この点に関しては, Parsons がなにもやらなかったというわけではないのですから, いわゆる evolutionary universals (= "religion", communication with language, social organization through kinship, and technology, in their simplest form) がどのような breakthrough (social stratification, political function の独立など) を経て社会発展を導いたかというかれの議論を詳細に検討する必要があるでしょう。もちろん, Zeitlin にとっては, Parsons の 〈normative elements〉論はドグマ (op. cit., p.55) であるということですが, この段階での Parsons が文化 (historically accumulated programs) と社会 (構造),

例えば stratification や kinship systems をどう関連付けていたかという点は大いに問題なわけであります。と申しますのも、この頃並行して台頭してくる biosociology の議論では、人間の文化（これこそが人間を他の動物から区別するものです）とこれを基礎付けている biological な構造（特に genes=genetic makeup）との間の gene-culture coevolution というようなことがいわれ始めているのです。Parsons を弁護することがここの主たる目的ではないのですが、もしこの時期の Parsons の議論を単なる伝統的進化論の再来であるとするだけなら、それは必ずしも承服し難いように思われます。なぜなら、（そう私には思われるのですが）、Parsons はある意味ではっきりと〈実証主義の立場〉（すなわち、social system を広義の adaptation によって捉え、これを機能分析にかけること）を選択しましたが、同時に、課題解決のためのシステムの活動を歴史的に蓄積された文化的プログラム（とその革新）——これらはいずれも人間の symbolic な活動を抜きにして語ることができないと思われまふ——を中心に据えて解明することに努力したのであります。その意味では、人間（この場合は、近代西欧諸社会のことですが）が〈あるべき姿〉（ought to be）——近代個人主義的民主主義——に向けて行動したとするのも、歴史と思想史の文脈では決して Parsons の個人的願望ではなく、近代の客観的史実から帰納によって導き出されたもので、したがって、Parsons がその社会発展の最終段階に〈democratic association〉を置いているというのも、近代西欧の社会科学としては当然の帰結であると思われるのです。もちろん、新カント主義者であった Parsons が、その〈歴史認識〉（そんなものは Parsons にはないと Zeitlin はいうでしょうが）に当って、具体的な〈歴史の reality〉と〈認識としての knowledge〉とをどのように架橋するかに大変苦しんでいたこと（そして、一つの方法を選択したこと）については、ここでは繰り返しますまい。ちなみにつけ加えますと、Marx と Engels は〈adaptation〉（こうした言葉は Zeitlin にいわせれば、すべてを“functionalese”する元凶だそうですが）というような述語こそ使ってはいませんが、人間社会の展開を、(i)個体の維持（経済）と(ii)種族の維持（血縁関係＝家族）という〈機能要件〉から出発して、政治組織や労働組織の発展・独立を描きあげてゆくという〈機能分析〉を、あの有名な『家族・私有財産・国家の起源』で展開しているのであります。

さて、初期 Marx（歴史における上部構造の重要性、人間における意志 volition と責任 responsibility の強調）と Weber を接合してマクロ理論（macrosocial theory）を構想する Zeitlin は、次にこれを動態化する

社会心理学を求めることになります。その詳細を紹介することはここではできないのですが、基本的なポイントは、この場合も psychologism に代表される実証主義（materialism and objectivism）と Weltanschauung philosophy に代表される主観主義（ここでは真理はいつも歴史的状況によって相対化されてしまうのですが——）の対立をいかに止揚するかが問題となっていると思われまふ。そのことの含意は、いうまでもなく、ここでも「人間固有」の科学が成立するのかどうかという、例の古くて新しい問題提起がなされているわけです。換言いたしますと、因果的決定論と主意主義的目的論の話であります。そこで、Zeitlin は、すでに示唆しておきましたように、Phenomenology, Ethnomethodology, それに、Symbolic Interaction を検討して、主として Mead の〈emergence〉と〈relativity〉の dialectical conception に依拠しながら、これを初期 Marx と結びつけることによって、social psychology のモデルを提唱するわけであります。すなわち、Idealism と mechanistic Materialism の対立の止揚ということであります。初期の Marx はヘーゲル哲学の形而上学的側面には与しませんでしたが、同時に idea を脳細胞の働きに帰するというような化学的還元主義（という Materialism）にも同意しませんでした。人間は self-consciousness をもつ実践の主体であって、そうである性質は生物学的に決定されているけれども、その性質の実現は歴史的・社会的文脈の中でのみ開化するのであるとする考え方、そして外界は人間の実践的活動（practical activity）によって形成されるとする考え方、これらはいずれも Marx と Mead に共通するものであるということでしょう。

For Marx as for Mead, nature is not objective in the sense that it is independent of men's will, or that it would be the same nature in the absence of men. The "world" or "nature" is always the man-made world and the man-shaped nature. Man is no tabula rasa passively receiving impressions from the outside world and responding to external stimuli. Quite to the contrary, man is an active cognizing subject who comes to know reality as he acts upon it. To account for experience adequately, therefore, requires that we recognize the contributing activities of the knower-actor to the object and consider the specific social-historical context of knower and object. (op. cit., p.245)

こうして、〈個人と社会〉に関しても、両者の弁証法的な〈共存〉が主張されることになるわけであります。Freud が援用されて、人間（あるいは Mead の“I”）の自

然的側面も遺漏なく指摘されております。これが Marx, Mead, Freud を結合した social psychology ということになるのですが、例えば、もし AGIL 図式に基づく〈人間〉の概念化を構想するなら、この程度の synthetic な視角は容易に導かれると思われるのですが、どうでしょうか。

Jeffrey Alexander

次に Alexander に移りましょう。1982年に Jeff の大著 *Theoretical Logic in Sociology* の第一巻が出版された時、私が洩れ聞いたことは、また、だれかがこの書物の翻訳を考えているという話でありましたが、このことは如実に〈日本的〉な社会学界の風土を象徴しているように思うのです。そんなことより、この俊英が期待していることは、かれの議論が日本でどのように受け入れられ批判されるかということで、その点を過日私に対して〈是非知りたい〉と申ししていたわけであります。

今回の仕事は、かれが UCB へ提出した博士論文に基づくものでありますが、その中心的関心は〈行為〉と〈構造〉、いい換えますと、主意主義的理論と社会的拘束の理論の対立を止揚する試みであったと申して差しつかえないと思うのです。丁度、Parsons が1930年代に *The Structure of Social Action* で行ったと同じやり方で Jeff は Marx と Durkheim (第二巻), Weber (第三巻), Parsons (第四巻) という具合に、この問題の答えを捜してまいるわけであります。その点に関する基本的な姿勢を第一巻を中心に次に検討してまいりたいと思います。

If sociology could speak it would say, "I am tired." But how can a fledgling discipline, scarcely a hundred years old, already feel the onset of senility? (Alexander, 1981, p. X Ⅲ)
これが序論の書き出しです。理論が疲れていては、社会学も元気が出ません。社会学の再生はその理論の〈再生〉(Revival) に大きく依存しているのだ、というのがかれの主張ですが、それにしても社会学がなぜ、かくも疲れてしまったのでしょうか。どうすればその理論の再生が可能となるのでしょうか？ その辺りについて、かれは続いて次のように書いています。

Surely this old age is premature, an ennui brought on by the consciousness of great challenges posed by the founding fathers that have proven difficult to fulfill. But this pervasive fatigue is not stimulated only by the epigoni's fear of defeat, of the humiliation that is the lot of those who cannot live up to their parent's achievements.

It has also been created by more proximate events: by the trivializing effect of the ever more powerful urge for "scientization," by the flood of well-intended but too often grossly misleading critiques, by the false promise of imminent transformation, and by the death of a great man.

(op. cit., p. X Ⅲ)

すなわち、founding fathers たちによる問題提起に 대응するのはそれ程容易ではないという理論的問題に加えて、〈科学化〉という矮小化や善良ではあっても外的批判、それに Parsons 自身の死も理論社会学の今日的状況に責任がありそうであります。

Jeff の第一義的関心は、今日の社会学にみられる〈scientization〉の基盤に対する挑戦です。社会学の矮小化をのり越えるより〈一般的な関心〉に導かれて社会科学の基礎を築こうというわけであります。Marx と Durkheim は sociological Materialism と sociological Idealism の相克を示す古典的な事例として吟味されるわけですが、もちろん〈解決策〉の方向はこれらの〈二者択一〉によってもたらされるものではないことはいうまでもありません。確かに、この二人の思想家は対照的にとりあげられています。主意主義的な傾向を示していた初期 Marx が(イデオロギー的、経験的、認識論的な理由によって)後期にはより道具的・構造的分析に傾くのに対して、Durkheim は初期の唯物論的な傾向から後期の主意主義的構造主義へと移行しているというのです。しかし、肝要な点は、この二人を統合してもっと多次元的な(multi-dimensional)理論が構築できるはずだと Jeff は診断するわけであります。

この課題は当然 Weber へ持ち越されることになるのですが、かれとてもこの点については〈部分的に成功〉(Jeff の評価)したに過ぎませんので、さらにこの問題は Parsons に引き継がれることになります。結論的にいえば、Parsons と社会学に〈完全な合意〉と〈一般的で統合的な理論〉をもたらすことに成功したわけではありません。むしろ、批判の洪水がこの巨人をほとんど溺死寸前にまで追いやったことはわれわれがよく承知しているところであります。その結果が、Mertonian School による〈多様性〉の主張でもありました。こうした状況の中でこの大著が書かれていることを、まず念頭に留めておく必要があります。

Jeff の議論は、つきつめれば〈科学〉そのものの性格にまで関係してくる根本的な問題に関わっています。しかし、社会学の〈論理〉としてのレベルでいえば、結局、それは社会科学における「実証主義」(Positivism)、すなわち理論を事実還元する立場(そして、この傾向は第二次大戦後のアメリカ社会学を支配しているというの

ですが——)と、これに対するアンチテーゼとしての Human Studies とをどう統合するかということになるわけです。結論を先取りしていえば、(やや平凡で恐縮ではありますが)、いわゆる post-Positivism の立場が支持され、これに見合った〈論理〉が要請されることになります。史的発展としてみれば、ここ50年位の間に科学に関する概念が radical positivist から logical empiricist、そしてさらには postempiricist, postpositivist へと移行して、この第三の段階では the scientific knower と the object known との間の関係が重要視されることで、科学的知見の scientific objectivity や universal validity についての考え方も従来とは大いに異なってくることになるわけです。Polanyi や Kuhn が援用されていますが、いずれにしても〈theory〉と〈data〉は両極分解で相互に無関係に存在するのではなく、きわめて相互作用的なわけであります。実は、私が社会学原論の講義の中で〈社会学〉の定義(その対象と方法の確定)に当って諸理論を検討する視角に〈知識社会学〉を援用しているのは、まさしく社会学の性質に関わるこうした特徴に留意しているからでありまして、通俗的に申しますと、何をみるか(対象)はどうみるか(方法)によって制約されますし、逆に新しい知見(経験的事実)はどうみるか(認識のための哲学)に影響を与えずにはおかないという自覚に立っているのです。この姿勢は、実は Alexander のそれとほとんど同じであると思われるのですが、それでは次にかれの議論をもう少し社会学的思考に即して眺めておくことにいたします。

社会学においてその理論を導く〈一般的論理〉(general theoretical logic)を語る場合留意しなければならない点は、それが、一方では(科学の環境の)物理的・経験的側面、他方ではその形而上学的・非経験的側面(前者の極に radical positivism があり、後者の極に antiscientific relativism がある)へと拡がる連続軸の上のさまざまな点でそれが議論される性質のものであるということです(その詳細を論ずることは、ここでは割愛せざるをえません)、いずれにしても、〈論理〉(theoretical statement)を、1) political commitment, 2) methodological choice, 3) empirical proposition, それに 4) model selection のそれぞれに還元してしまう四つの立場がこれまでに存在してきたようであります。しかし、こうした考え方はすべて〈一般性〉(generality)のある〈論理〉の形成を妨げてきたと申してよからうかと思われます。例えば、K. Mannheim に代表される立場が 1) でありますが、ここでは社会学理論の基礎(その nonempirical “philosophical” presuppositions)は一定の政治的コミットメントを表わす〈イデオロギー〉だと

いうわけです。〈知〉は〈行為〉(の一形態)であり、したがって一般的・理論的〈論理〉の分析はこうした諸社会の〈社会的基盤〉を分析することと等値されることになるわけであります。このような考え方は W. Stark, R. Bendix, Martindale らを経て C. Wright Mills や L. Coser, さらには R. W. Friedrichs や A. W. Gouldner に受け継がれるのですが、Alexander にとってはこれをそのまま肯定することはできません。特に、Jeff にとってこの点は今度の作品のメインテーマといってよい位重要ですから原文を引いておきましょう。

The basic rationale for this approach to a post-positivist theoretical logic must be rejected. To portray the choice confronting generalized analysis in sociology as a choice between positivism, on one side, and determination by ideological assumption, on the other, is, quite simply, to establish a false dichotomy. The ideological dimension plays a fundamental role in every sociological statement, but at the same time the general nonempirical presuppositions that inform sociological reasoning can in no way be reduced to them. In one sense, the remainder of this chapter, and, indeed, the rest of this entire work, constitutes an argument in support of this criticism, particularly insofar as I address many of the same intellectual issues as does the “sociology of knowledge” I have described here. (op. cit., p.44)

社会学的 reasoning を導く〈論理〉を単なる方法論の選択の問題に還元してしまう第二の立場も困ったものがあります。例えば、M. J. Mulkay がそうですが、かれによれば社会学者は理論的一般化と経験的事実のより緊密な対応を求めて、いわば〈戦略的〉なフレームの選択を〈断行〉するわけでありまして、これが例えば Pareto → Parsons → Merton → Blau と流れる機能主義から交換理論への移行の基本的なメカニズムであるというわけです。より一般的には、科学哲学のレベルでの〈方法論上の立場〉の選択ということになります。しかし、再び一般的な問題としても、方法論選択の決定とイデオロギー的な諸仮定、それに具体的な社会に関する観察データが、ひとりの社会学者の中でそれぞれ〈autonomy〉を保っているなどということは考えられないことというべきでありましょう。

理論的フレームの科学的・一般的〈論理〉の探求をなおざりにして、それを empirical proposition に還元しようとするのが第三の立場ですが、これについては Jeff は conflict theory vs. consensus theory を例に次のようにいうのです。基本的にはこの議論のレベルそのものが

論理の一般性を求めるには〈具象〉(empirical level)に近すぎること、したがって、論者によっていわゆる〈Conflict School〉の中にだれを包摂するかについては大きな意見の差異があること、それで、より一般的なレベルを求めて〈論理〉の探求が必要であるが、それは多分 coercion と value commitment との扱いとして考えられるだろうと示唆するわけです。いうまでもなく、〈conflict〉そのものは今日 functionalism の中に充分に吸収されつくしうするという議論(例えば、B. N. Adams, Anthony Giddens, Friedrichs ら)が存在するのです。

理論的〈論理〉の model selection への還元とは、具体的には functionalism をめぐる議論として展開するのですが、結論的には、functionalism はいわゆる collectivist model の一つとしてきわめて一般性のある logic をもっていて、逆にいえば、例えば conflict functionalism と consensus functionalism というような区別が可能となるかも知れないのであります(同様に、normative functionalism vs. utilitarian functionalism, rational functionalism vs. nonrational functionalism, etc)。さらにいえば、Mills, Zeitlin, Gouldner, Bottomore などこれを conservative ideology に還元しようとする試みもこうした意味でいただきかねるということになるでしょう。機能主義は単なるモデルではなくそれが社会学理論上のより一般的な〈論理〉をもつ点を指摘して、システム論の1)動態化(ex. morphogenesis), 2)シンボル化(ex. W. Buckley), そして3)自然化(natural modelの提唱, ex. R. Scott)として、モデル自身をも一層洗練しようとする方向は、すでに私も“Functionalist Sociology since the 1950's”(という論文)で示唆しておいた所でもあったわけでありました。特にマクロ分析における system-functionalism の〈論理〉は、伝統的には Marx と Weber においてもみられる(Werner Stark)ばかりではなく、最近では、マルクス主義的社会学(ex. Piotr Sztompka)とパーソニアン社会学(ex. Smelser, Loomis, Lipset)の両方でこの概念をめぐる両者の〈convergence〉さえもが示唆されているという現状であります。そこで次には、Jeffrey Alexander が具体的にはどのように社会学における〈理論的論理〉を構想するのかという問題が浮び上がってくることになりましょう。その点をわれわれの当初の問題意識に結びつけて要約しておく、略々次のようなこととなります。

いうまでもなく、この〈論理〉の追求は、もっとも〈一般的な〉レベルで行なわれなければなりません、すでにみたように今までの議論はレベルもまちまちで、その結果、生産的な成果を生み出すことに失敗してきました。

Jeff はこれを〈the rationality of action〉と〈the nature of social order〉という二つの焦点(これこそが the true presuppositions of sociological debate であるとかれは考えるわけです。op. cit., p.65)で整理・展開しようというのであります。

ある意味ではまったく当然のことといってもよろしいのですが、Jeff の立場は私自身がもう何年も前から〈社会の概念化〉に関して述べております〈仮説的前提〉、すなわち観念主義対唯物主義、要素主義対全体主義(拙著『体系機能主義社会学』、川島書店、1970年)の主張とまったく軌を一にするものであります。もっとも、どちらかといえば Jeff の議論の中心は前者、すなわち認識論的には Idealism と Materialism (社会学の領域ではこの頭に sociological という形容詞をつけなければなりませんし、また実は一般認識論レベルと社会学理論レベルを混同しないことが大切であるとかれはいうのですが——)の対立軸であって、これは何よりも社会的行為における subjectivity (freedom) と objectivity (constraint or determinism)に関わってきますから、そこから二次的に第2の軸(個人対社会)の問題も必然化するという発想になります。しかし、いずれにしても、過去の〈理論的論理〉をめぐる Idealism 対 Materialism の葛藤については、理論的には、1) Idealism の選択、2) Materialism の選択、それに 3) 両者の統合という三つの解決策しかなく、Jeff は、1), 2)を共に〈one-dimensional〉と呼んでのけ、3)を〈multidimensional〉と呼んで自分の立場とするのであります。そして、subjectivity の関心はなかならず norms と motivation に関わるわけですが、これを the 〈problem of action〉、それから objectivity の関心は複数の個人の相互作用と関わるのですが、これを the 〈problem of order〉と呼んで、この二つの問題に関わらして〈theoretical methodology〉(theoretical logic)を構築しようというわけでありました。

その点に関して結論だけ申しのべておきますと、社会(科)学における一般性のある客観的な〈理論的論理〉を構築するためには、1) action と order のそれぞれにそれ固有の structure を確立するという作業、2) この両者が共に autonomy をもっているということの確認、そして 3) これらを分析するための論理として multidimensional approach が必要である、という点が重要であります。ちなみに、この議論は次に扱う Luhmann のそれを彷彿させるものであります。その帰結が、私の主張している二つの「仮説的前提」(Idealism vs. Materialism, Elementalism vs. Holism の二軸)の〈統合〉ときわめて類似したものであることについては、このお話しの最後の部分で示しておきたいと思っています。

す。しかし、いずれにしても、これらの問題はすべて西欧の思想的伝統の中で語られているという意味で、一定の制約をもっているということは否定できないわけですが、それではどのような形で、社会学理論のレベルでの〈東洋（思想）の貢献〉が可能となるのでしょうか。

（以下次号）

*1984年6月4日入手。